

機関番号：12601
 研究種目：基盤研究 (C)
 研究期間：2008～2010
 課題番号：20520044
 研究課題名 (和文) 現存最古のニヤーヤ哲学綱要書『ニヤーヤ・カリカー』の校訂テキスト作成と翻訳
 研究課題名 (英文) The critical edition and translation of the *Nyayakalika*, the oldest extant compendium of Nyaya philosophy
 研究代表者
 丸井 浩 (MARUI HIROSHI)
 東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
 研究者番号：30229603

研究成果の概要 (和文)：「インド論理学」の発展に多大な寄与を果たしたニヤーヤ哲学の綱要書である『ニヤーヤ・カリカー』（論理の薈）の写本 6 本を照合して、批判校訂テキストおよび内容一覧（抄訳・解説を含む）を作成し、初期ニヤーヤ哲学の体系を一覧する資料的基盤の強化を果たすとともに、同書が 9 世紀末にカシミールで活躍したジャヤンタの真作である可能性がきわめて高いことを論証した。本研究の成果の一部は、論文 1 本として発表したほか、学位請求論文（2011.4.1 提出）に組み入れた。

研究成果の概要 (英文)：In this research project the critical edition has been prepared on the basis of collating six manuscripts to revise the poor quality of the only printed edition of the *Nyayakalika*, an extremely valuable compendium of Nyaya System attributed to Jayanta who flourished in the latter half of the ninth century in Kashmir. The table of content and partial annotated Japanese translation of the text have also been made. Moreover, the study has shown that it represents an earlier stage of the Nyaya System, and has given ample evidence in support of Jayanta's authorship of it. Apart from the critical edition, the main result of this project has partly been published in one paper and largely been incorporated into the Dissertation that was submitted to the University of Tokyo on April 1, 2011.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：インド哲学

科研費の分科・細目：[分科] 哲学 [細目] 印度哲学・仏教学

キーワード：ニヤーヤ・カリカー、ジャヤンタ・バツタ、テキスト校訂、内容一覧、ニヤーヤ・マンジャリー

1. 研究開始当初の背景

(1) 「インド論理学」の発展に多大な寄与を果たしたとされるニヤーヤ哲学の初期思想は、「仏教論理学」に比べてあまり研究が進

展していない。歴史的記録をほとんど残さないインドの思想風土のもとでは、「古い」思想は後代の解釈のもとで衣替えされ、元来の意味を再構築するには高度な文献考証を経

なければならない。後代に大きな変容・展開をとげたニヤーヤ哲学は特にその傾向が著しい。そのなかにあつてジャヤンタ（9世紀末に活躍したニヤーヤ学者かつ詩人）に帰せられた『ニヤーヤ・カリカー』（以下、「本書」）は、恐らく現存最古のニヤーヤ哲学綱要書であり、初期ニヤーヤ哲学体系の全貌を比較的手短に一覧するのに格好のテキストである。

(2) しかしながら本書はこれまでほとんど研究されることがなかった。唯一の版本（1925年出版）がそもそも発行部数が恐らく相当少なかったであろうことに加えて、末尾に脱落部分を含みかなり劣悪な状態であること、ならびに、インド哲学の名作として有名な大著『ニヤーヤ・マンジャリー』の著者ジャヤンタの真作ではなく、後代に同書から適宜抜粋してまとめた偽作であろうとの風評が、大いに災いしたと思われる。

(3) そのような状況を背景として、研究代表者は本書の写本のコピーないし影写を可能な限り入手し、照合を行って批判校訂本を作成する必要があると考えた。またそれと同時に、本書がジャヤンタの真作か偽作かを徹底的に考証して、本書が初期ニヤーヤ哲学のテキストとしてどのような重要性を持ちうるかを明にするべきであると考えた。以上が本研究を始めるに至った背景である。

2. 研究の目的

(1) インドの合理主義哲学を代表する哲学体系（ないし哲学学派）であり、他学派、特に仏教との熾烈な論争を通じて「インド論理学」（プラマナ論）の発展に多大な貢献を果たしたニヤーヤ哲学の初期思想を一覧するために、きわめて重要と思われるニヤーヤ哲学綱要書である『ニヤーヤ・カリカー』の現存唯一の版本がかなり劣悪であることに鑑み、同書の批判校訂テキストを作成することによって、これまでほとんど手つかずであった同書の研究を促進するとともに、謎の多い初期ニヤーヤ思想の解明に大きく資することが期待される、確実な一次資料の確立を図る。

(2) 『ニヤーヤ・カリカー』が、9世紀末にカシミールで活躍したインド哲学者かつ詩人であるジャヤンタの真作であるか否かを精査し、あわせて同書の語句表現および内容をジャヤンタの主著『ニヤーヤ・マンジャリー』とそれと綿密に比較して両者の対応関係を明確にすることを通じて、同書がニヤーヤ哲学史に占める思想的意義を解明する。

(3) 『ニヤーヤ・カリカー』の内容一覧、な

らびに翻訳（抄訳）・解説をほどこし、これまでその正確な全体像が一般読者に知られることのなかった（初期）ニヤーヤ哲学、ひいては「インド論理学」の理解を、文献実証的分析にもとづいて広めるための着実な学問的基盤を築く。近い将来に同書の批判テキスト、訳注・解説付きの単行本の出版へと確実につなげる成果をめざす。

3. 研究の方法

(1) 1925年にワーラーナシーで出版された『ニヤーヤ・カリカー』の現存唯一の版本は、末尾に脱落があるほか、明らかな誤字脱字が少なくなく、しかも使用した写本についての記述が一切なされていない。したがって、同書の写本を蒐集するにあたっては、まずマドラス（現チェンナイ）から出版されている『写本カタログの新カタログ』（該当するのは第10巻、1978年）の情報を、ほとんど唯一の手がかりとせざるをえない。ただしこの新カタログが参照したはずのカタログないし類似の写本情報集成の多くは、参照が困難であるため、当面、所在が確認しうる写本資料の入手に努めることとした。そのほか同新カタログが見落としている可能性を考慮して、写本情報の詳しい研究者から適宜情報を得ることも行った。

(2) 『ニヤーヤ・カリカー』の批判校訂本を作成するにあたっては、まず入手しえた写本の中から、保存状態が良好である写本を優先的に扱い、また予備作業として、ポイントとなる箇所（特に冒頭の詩節と末尾）を照合して読みの信憑性が高いと思われる写本の選定を行うと同時に、暫定的な写本系統を措定するとともに、シャーラダ文字の写本には特別の配慮を施すこととする。同書の著者として帰せられているジャヤンタはカシミールの文人であり、もし同書が彼の真作であるとすれば、同書の写本は元来シャーラダ文字で書かれていたはずだからである。ただし真作か否かの考証には、シャーラダ文字写本の信憑性如何の問題が絡んでいるので、相互依存の論理的誤謬に陥らないよう慎重に扱うことも必要となる。このようにして選定された良好の写本を柱としつつ、文献学的に確実な方法論を踏まえて校訂テキストを準備するが、異読情報に関しては欄外記述も含めて可能な限り網羅的な提示を行うこととする。また異読情報のほか、他のテキスト（特に『ニヤーヤ・マンジャリー』とジャイナ教哲学文献『スヤードヴァーダ・ラトナーカラ』）に見られるパラレルを対応付けて脚注に付す。

(3) 『ニヤーヤ・カリカー』が、『ニヤーヤ・マンジャリー』の著者ジャヤンタの真作であ

るかどうかについては、両者の字句表現、思想内容そのほかの綿密な比較検討を行い、可能な限り問題決着を図るとともに、他の関連文献も精査して、同書に提示されているニヤーヤ哲学の諸相が、ニヤーヤ哲学の思想的展開の中でどのような位置を占めるかを、いくつかの論点に絞って明確にする。

(4) 『ニヤーヤ・カリカー』は、ニヤーヤ哲学の骨子をなす 16 原理の定義・分類・実例説明から成り、冒頭にマンガラ詩節、末尾にまとめの一文と一詩節が付されている。こうした作品構成に即し、新たに作成した校訂テキストにもとづいて、16 原理の各内容説明の一覧を、翻訳（抄訳）と解説を適宜施すことにより完成する。なお解説にあたっては、異読情報、『ニヤーヤ・マンジャリー』その他のテキストに見られるパラレルとの対応関係、さらにはニヤーヤ哲学史の展開へと視野を広げるために重要な説明を中心とするが、インド論理学への入門をかねた一般読者向けの解説も心がける。

4. 研究成果

(1) 『写本カタログの新カタログ』第 10 巻に『ニヤーヤ・カリカー』の項目下で提示された写本情報は 13 であるが、そのうちコピーないし影写が入手しえた同書の写本は合計 6 本であった。そのほかは新カタログが言及する写本カタログないし写本情報集成そのものに当たることができないために当該写本の所在が確認しえなかった。なお Baroda（現バドーダラ）の東洋学研究所に保管された 2 写本の存在は現地で確認しえたが、結果的には閲覧のみで資料入手には至らなかった。ただしその中の 1 本は入手しえたパターン写本と恐らくは同一のものと思われる。このほか新カタログには記載されていない写本 2 本を入手することができた（ウッジャンおよびカシミールから）。以上の点に加えて、①新カタログに記載されている写本情報で 1 件、まったく別のテキスト（類似の書名）の写本（BORI, 572 of 1886-92）が紛れ込んでいること、ならびに②同新カタログには、“Bhatta Gaṇeśa (Bhāṭṭagaṇeśa)” の著者名の下に、同名の『ニヤーヤ・カリカー』が別のテキストとして立てられているが、入手した写本のコロフォンに、「この『ニヤーヤ・カリカー』は Bhāṭṭagaṇeśaka によって“もたらされた” (ānita)」と記載されている写本が複数あることから、恐らくは同一作品であろうという結論に至った。

(2) 入手した写本 8 本（うち 4 本はシャーラダ写本）のうち、主要な照合写本 6 本（シャーラダ写本 3 本）を選定し、特にバンダル

カル東洋学研究所所蔵のシャーラダ写本 1 本（No. 386 of 1875-76）が、冒頭のマンガラ詩節および版本に脱落している末尾部分の照合その他から、恐らくは最も信憑性が高いであろうことが判明した。したがってその写本を軸としつつ、他の諸写本および版本からの異読を収録して、批判校訂テキストを作成した。これによって不備の多かった現存唯一の版本の読みは大幅に訂正されることとなった。ただし冒頭と末尾（一般に写本伝承の中で損傷を被りやすい箇所）を除けば、版本の読みを訂正すべき箇所はそれほど多くはなかった。なお研究期間終了後に、重要と思われる写本の影写資料 1 本を入手するに至り、この写本情報も加えた改訂作業が残されることとなった。

(3) ①『ニヤーヤ・カリカー』の冒頭には神に帰依するマンガラ詩節が付されているが、版本に見られるシヴァ神に捧げた同詩節は『ニヤーヤ・マンジャリー』に同一詩節が見られ、同一表現の繰り返しを極度に嫌う文人ジャヤンタの文体から判断するに、偽作説の根拠となりうると思われたが、入手した写本の中にシヴァ神を讃えるまったく別の詩節を含むものが複数あることが確認され、真作説に対するほとんど唯一の障害が、これによって解消する可能性が開けた。ただし冒頭詩節の異同は写本間で相当に大きく、テキスト校訂上の問題点を露呈することとなった。

② 版本末尾の脱落部分も写本間はかなり語句表現の違う異読が見られたが、対応する『ニヤーヤ・マンジャリー』中のパラレルを考慮するなどして、恐らくは「自派内部の見解の相違には言及せず、また他学派の見解に対する論難も行わずに」の読みを選択するのが妥当であると結論した。この読みがオリジナルであるとすれば、主著においてニヤーヤ学派内部の論争にしばしば多くの紙面を費やしたジャヤンタの特質が、この末尾の表現から垣間見られることになり真作説の有力な根拠となりうる。

③ このほか字句表現の点で『ニヤーヤ・マンジャリー』と顕著な類似性が見出される事例は、数多くの原理定義、分類、実例説明において見出されるが、とりわけ「認識手段」(pramāna)「理論的吟味」(tarka)、「暫定的容認の定説」(abhyupagama-siddhānta) に関して、ジャヤンタの特徴が顕著に伺われる類似性が浮かび上がった。なお字句表現の類似性が両書間で数多く見出されるとはいえ、完全に同一の文章が見出されるケースはほとんどなく、同一表現を嫌うジャヤンタの文体に鑑みても、これらの対応関係は著者同一説を妨げるには至らないと言えよう。

④単なる字句表現にとどまらず、思想内容の両書の対応関係も著しいことは、③で挙げ

た事項説明にも当てはまるが、とりわけ「シャブダ」の説明に関して、prāmāṇya 論の扱い方や、ヴェーダ以外の宗教聖典の権威問題の議論などに『ニヤーヤ・マンジャリー』との親近性を強く示している。

⑤このほか、「認識すべき対象」(prameya)の一つである artha の概念規定に関しても両書の対応関係は著しく、しかも後代のニヤーヤ文献における同概念の展開を辿ることによって、両書に見出される解脱論的視点が濃厚な artha 概念の理解が、初期ニヤーヤ思想の特質を大きく反映していることが明白となった。この点は、「暫定的容認の定説」や、「シャブダ論」などにも同われる特徴であり、両書ともにニヤーヤ哲学の発展段階の中の、かなり「古風な」解釈を代表するものとして注目に値するテキストであることが浮かび上がることとなった。

⑥以上のことから、『ニヤーヤ・カリカー』の著者は『ニヤーヤ・マンジャリー』の著者と同一であると、ほぼ断定しうることが明らかになった。またたとえ別人が後に後者から該当箇所を抜粋し、字句表現適宜を変えた上で『ニヤーヤ・カリカー』を作成したと仮定したとしても、後代には捨てられることになる「時代遅れの」古風な解釈が少なからず見出されることから、同書が『ニヤーヤ・マンジャリー』よりも相当に後代に作成された可能性はほとんどなく、その意味でも同書が初期ニヤーヤ哲学の全体像を一覧する上できわめて貴重なテキストであることに変わりはない、という結論に達した。

(4) 『ニヤーヤ・カリカー』の内容一覧を作成し、かつ、第 15 原理 (jāti)、第 16 原理 (nigrahassthāna) を除く部分に関しては、和訳と若干の訳注を施す作業は終了した。これによって、近い将来、同書の校訂テキストおよび訳注を合わせた単行本の出版に向けての準備作業は概ね完了したことになる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

①丸井 浩、*Nyāyamajjari* に登場する「六タルカ (ṣattarkī)」の意味—ジャヤンタは「六派哲学」を知っていたか?—、インド論理学研究、査読有、I、松本史朗教授還暦記念号、2010、pp. 1-40

[学会発表] (計 3 件)

①MARUI HIROSHI, Philosophy or religion? Reasoning and argumentation as a bridge over inter-religious conflicts: By way of

an invitation to the following presentation on Indian philosophy, XXII World Congress of Philosophy: Rethinking Philosophy Today, 2008. 7. 30, Seoul National University.

② MARUI HIROSHI, The meaning of a diversity of established world views or tenets (*siddhānta*) in debate: What does Jayanta's explanation of NS 1.1.26-31 tell us?, International Conference: World View and Theory in Indian Philosophy, 2009. 9. 2, Casa Asia, Barcelona.

③ MARUI HIROSHI, Examination of the meaning of 'prāmāṇya' with special reference to its use for the Veda or 'verbal testimony' (śabda) in the Codanāsūtra-adhikaraṇa of *Ślokavārttika* and some Nyāya texts, 14th World Sanskrit Conference, 2009. 9. 2, 京都大学

[その他]

学位請求論文 (東京大学):

丸井浩、ジャヤンタ研究—中世カシミールの文人が語るニヤーヤ哲学—、2011、ivpp. +384pp. (特に第 1 章第 3 節、第 3 章第 3 節、および第 4 章に本研究の成果が組み入れられている。)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

丸井 浩 (MARUI HIROSHI)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号: 30229603

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号:

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号: